

川崎市の地図とどう出会わせるか

川崎市立土橋小学校 山田 邦昭

1 はじめに

川崎市は、海沿いの埋立地、多摩川沿いの平地、多摩丘陵等、地形が変化に富んでいる。大部分は住宅地であるものの、工場の多いところ、畑が多く残されているところ等、土地利用のようすにも違いが多く見られる。

場所によって市のように違いがあることを考えるためにどのように学習を進めていけばいいのか、どのように「川崎市」と出会わせたいのかを考えてみた。

2 身近な地域の学習から川崎市の学習へ

以前は3年生の最後に行っていた川崎市の学習を身近な地域の学習に続けて行うことになった。市の学習について、小学校学習指導要領解説社会科編に、「学校の周りの地域の様子を調べ、それに続けて市といった行政的な範囲に広げていくようにする必要がある。」との記述があるからである。

ただ、この時期の3年生に身近な地域の学習から一気に市の学習に広げていくのは難しいのではないかと思われた。そこで、まちたんけんを行い作成してきた絵地図を学習のスタートとして、写真や交通網等をきっかけに、自分たちの住む宮前区のあたり、川崎市へと、地図を少しずつ広げていくイメージで単元を構想してみることとした。

3 「学び方を学ぶ」ことを意識して

身近な地域の学習と違い、調べに行きたくても何回も見学に行ける学習ではない。掛地図と川崎市の3年生全員に配付されている副読本『かわさ

き』をうまく活用していきたい。掛地図、『かわさき』に掲載されている写真や資料を、どこで、どのように使ったら効果的かを考えてみることにした。

資料を使って調べる学習は、ほぼはじめてということもあり、「学び方を学ぶ」ということを意識し、宮前区のあたりの学習を行うなかで、資料の見方、学習の視点作りなどを、ていねいに指導するようにした。

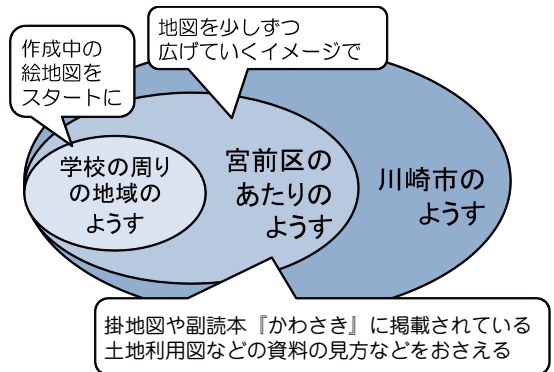


図1 単元のイメージ

4 授業の実際

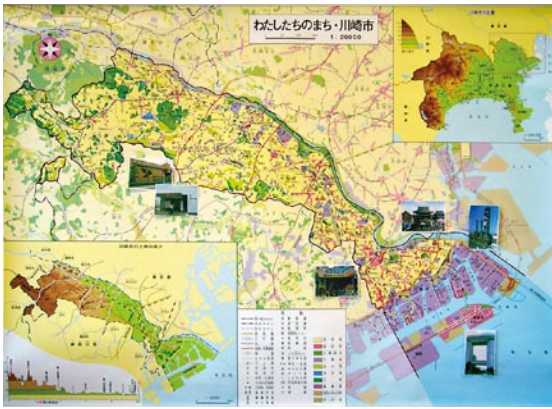
【単元の導入】

まず、身近な地域の写真を見せて絵地図にはることを通し、身近な地域の特徴をふりかえった。「その写真は○○！」と順調にはっていき中、学区ではない川崎市内の写真をまぜていった。「こんなところあったっけ?」「◇◇じゃないの?」「◇◇じゃないよ。人が多すぎる」といったやり取りが行われ、興味が高まっていったように感じる。

明らかに身近な地域のようすとはちがう海沿いの工場地帯の写真を見せると、「こんなところ絶対ない！」と口々に言った。「でもね、ここはみんなが住んでいるところなんだよ」と言うと、不思議そうな表情。そこで、〈川さき市宮前区土橋〉と板書し、「みんなは川崎市というまちに住んでいるんだよ」と伝えた。

【地域版地図との出会い】

ここで、掛地図『わたしたちのまち・川崎市』の登場である。興味が高まっていた子どもたちは食い入るように地図を見始めた。川崎市の掛地図に先に提示した写真をはっていった。川崎市に海があることに驚く子がたくさんいた。「魚の形に見える」「ブーツに見える」等、たくさんの発言が出て、川崎市の地図との出会いは成功だったと思われる。



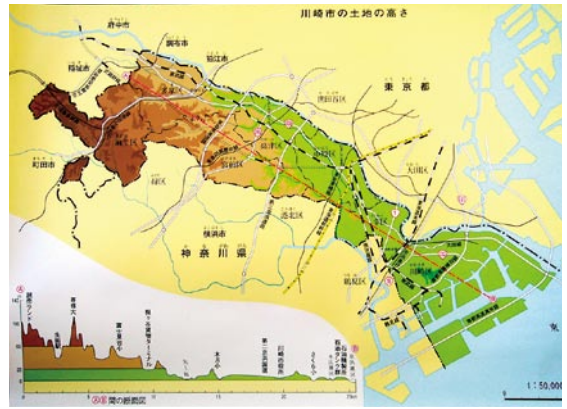
この段階で、「地図を見てわかることは?」と言っても、地図の見方を知らない子どもたちは戸惑うばかりであろう。次時の宮前区を扱った学習では、方位記号、凡例(地図記号、色が表わす意味等)をしっかりとおさえるようにした。この段階のおさえが、この後の学習に活かされることになった。



川崎市内の全小学校が名前入りで示されている等、いろいろな情報が載っており、休み時間にも掛地図をずっと眺めている子がたくさんいた。

【土地の高さと関連づけて】

学習の終盤の「同じ川崎市なのに、なぜ南の方に工場が多いのか」という学習では、掛地図の左下にある「川崎市の土地の高さ」という地図が活躍した。「川崎区に大きな工場が多いのは、広くて平らなところがあったからじゃないかな」「土橋に大きな工場がないのは土地が高めで、広いところがないから」と土地のようすと関連づけた発言が聞かれた。



5 おわりに

身近な地域の学習に続けて市の学習に広がっていくことで感じられたよさとしては、「土橋のまちの特徴をとらえたときの視点(人が集まるから駅のまわりにはお店が多い等)を使って、自分たちの地域と比べて川崎市の特徴をとらえることができたこと」「川崎市の学習をすることで、自分たちの地域をふりかえることができたこと」等があげられる。同じ見方をくり返すことで、社会科的なものの見方・考え方が少しずつ身についていくのだと思う。また、社会科と出会う3年生の初期段階として、何を調べるのか、どこに目をつければいいのか、どうやって調べたらいいのか等、「学び方を学ぶ」ことはとても大切なことだと改めて感じた実践となった。

注：掛地図 『わたしたちのまち・川崎市』
編集協力 川崎市立小学校社会科教育研究会
制作・発行 株式会社帝国書院